

3 劇場をつないで見えた、ネットワーク時代の劇場の可能性 —札幌、兵庫、北九州、3 劇場連携「舞台技術セミナー」をレポートする—

すずき しんいち
鈴木 伸一

プロローグ

12月12日、札幌、西宮、北九州という国内を縦断、トータル1,500km離れた3つの劇場をネットワークでつなぎ、同期セッションを行うという、ネットワーク時代を先駆ける、新たな劇場文化の在り方を模索する意欲的な「舞台技術セミナー」が行われた。参加した劇場は、札幌文化芸術劇場、兵庫県立芸術文化センター、北九州芸術劇場。これら3つの劇場は、いずれも、地域に根付いた活発な創造活動、発信型の事業を行っていることで知られる、国内の文化拠点ともいべき公共劇場である。ネットワークで結ばれた3つの劇場のどこかが主ではない、また、どこも主たる劇場であるというこのセミナーの趣旨を考えると、個々の劇場での客席の受けた印象は、それぞれに報告されるべきものかも知れないが、この報告は筆者が立ち会った西宮の兵庫県立芸術文化ホールの客席での印象を元にしたものであることをあらかじめお断りしておきたい。

さて、それでは劇場に入って当日の進行に沿って報告することにしよう。

当日の兵庫県立芸術文化センターの大ホールの客席には、関西エリアだけではなく、様々な地域から様々な立場の参加者、200人強が集まり、北九州、札幌を合わせると300人弱の人が集まったという。ネットワーク技術の実験的なセミナーであるにもかかわらず、これだけの人が集まったということに、これからの公共ホール、公共劇場を取りまく環境変化への不安と新たな技術的な展開への期待とが関係者の間に広まっていることがうかがわれた。

第一部 オープニングセッション～技術的解説

緞帳が上がると、ステージ上には、兵庫県立高砂高等学校のジャズバンド部「Big Friendly Jazz Orchestra」の演奏、バンドの背後のスクリーン上では、その演奏に合わせて、北九州市立高等学校ダンス部「N9SD CREW」のダンスパフォーマンスが繰り広げられる。冒頭のここだけでも、地理的な距離を超えた新たなパフォーマンスの可能性が感じられる。

次に、ヒビノ（株）阿部氏、古河ネットワー

クソリューション（株）山谷氏から今回の3拠点をつないだネットワークシステムについての解説が行われた。今回の特徴は、使用している回線は、汎用のNTTフレッツ光回線でありながら、映像、音響、照明、インカムを一つのネットワークに載せ、ネットワークを介して遠隔地を結び、遅延もライブパフォーマンスが行えるほど抑え込まれている点であるという。技術的な詳細については、是非、JATET技術展などでの報告を待ちたいと思う。

この解説に続き、札幌文化芸術劇場で、伊藤氏とヒビノ（株）庄氏の対談が行われ、コンテンツ不足、創客に悩む地方劇場においては、ネットワークの活用による地域間の格差の是正、市民が抱く劇場への敷居の高さを下げる効用について語られた。この場合、重要なこととして、収録されたものの再生ではないこと、また一方通行の「配信」「配給」されるライブビューイングにはない、相互に一体感を持ちうる臨場感であり、それによって同時性が生まれ、参加意識が生まれること、それを実現するためには、ネットワークにおける双方向性の実現が必須であることが指摘された。

第二部 鑑賞サポートとパネルディスカッション

第二部は、北九州から、九州大学の尾本教授から音響工学的な立場からの音場再生技術の現状についての解説、同じく九州大学の長津助教による、身体障害者、知的障害者、高齢者といった人々に向けた社会包摂という立場から、弱者が直面する障壁に対する新たな技術による克服の可能性への期待が語られた。

両先生の講演内容は、それぞれが幅広く、また奥深いもので、この紙面だけでは紹介できないが、ポイントだけを記すと。

音場再生技術が、物理的なパラメーターを正確に再現するだけでは、自然な音場再生を得られず、芸術的な表現、感性をも加味した統合型の音場再生が求められてきているという尾本教授の解説は、今日よく耳にする、「イマーシブ」として紹介されているメーカー主導の音響技術が、果たして、物理的な正確性、演出表現の創造性の両面からの批評に、耐えうるものなのか、

考えさせられた。

また、長津助教の、社会的な弱者のために鑑賞環境を整えることが、ひいてはあらゆる人の鑑賞環境に変革をもたらし、こうした技術革新を通して、新たな表現が生まれ、コンテンツの在り方そのものを変えていくのではないかという問題提起は、我々がともすれば、「音響」、「照明」「劇場技術」といった狭い枠に囚われ、忘れてしまいがちな「技術」の社会的な影響力、社会的責任といった面を改めて想起させ、傾聴に値するものであった。

両先生の講演を受けて行われた、札幌、西宮、北九州を結んだパネルディスカッションでは、今回の企画をそれぞれの劇場で推進した、伊藤氏（札幌）、金子氏（兵庫）、中村氏（北九州）の3人に、今回の、3劇場の音場を相互に重畳するシステムを構築したヒビノ（株）の宮本氏が加わり、「繋がり合うこれからの劇場」というタイトルで、それぞれの思いが語られた。さりげなく進行するディスカッションは、一方は、朝は吹雪だったという札幌であり、一方は北九州であり、それを自然に受け入れて、議論に耳を傾ける客席の有り様に、技術が社会的に受容されていく過程の一端を見たように思った。



写真1 三元パネルディスカッション

冒頭、これまでの「ライブビューイング」という言葉は、一方通行の受け身のイメージがつかまとうので、アンビエントも含めた、音、映像の双方向性を備えた今回のようなイベントは「ライブストーリーミング」としたらどうかという提案が宮本氏からあった。宮本氏は自身の経験から、音楽においては空間を伝わってくる音の波に浸ること、自分を取り巻く音場の重要性を力説されたが、これは、音場再生において、芸術的な感性が重要であるとの尾本教授の指摘に呼応するものと思えた。実際に、今回の音場を

形成するシステムは、物理的な厳密性を求めるアプローチとは異なっている。各劇場では、10本の単一指向性のアンビエントマイクによってその音場が収録され、他の二つの劇場に送られる。送られてきたアンビエント信号は、10本のマイクに個々に対応する、10系統のスピーカで拡声され、その拡声された音が、その劇場固有のアンビエント音とともに、その劇場のアンビエントマイクによって収録され、再度、元の劇場に戻される。こうして二つの、あるいは三つの劇場にまたがる大きなフィードバックループを形成されるなかで、3つの劇場の音場は、重畳され、融合されていく。一つの劇場に、2つのサブの劇場が空間を接して併設されているというイメージだろうか？物理的にはどのような空間が形成されているのか、インパルス応答だけでも求めたい衝動にかられたが、実際に客席で感じた音場は、このアンビエントシステムによって残響感、拡がり感、もちろん音量感も増し、空間体験を臨場感のあるものとしていた。

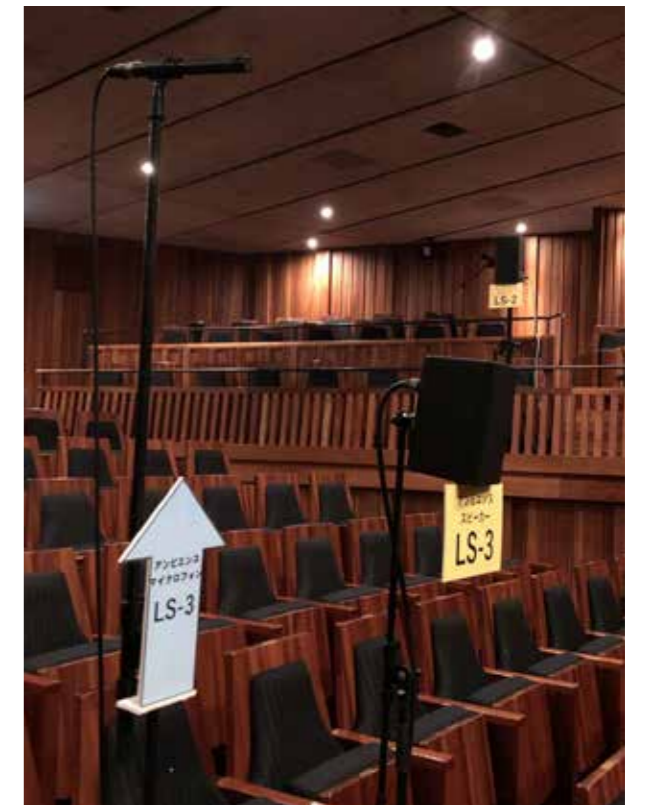


写真2 アンビエントマイクとSP

では、こうした劇場を結ぶことによって生まれてくるものは何だろうか？東京、大阪など大都市圏が持っている芸術的なリソースを、地方に供給して、同時に劇場体験を共有するということがまず考えられる。しかし、それだけではないと、パネルディスカッションは続く。地域には、その地域では知られていても、「全国区」ではない、埋もれた優れた作品、演奏団体、表

現集団が存在している。そうした団体にスポットが当たり、地域間の交流から全国へ、世界へと発信していく道も拓かれていくのではないかと。この指摘は、まさに次のセッションの高校生たちのパフォーマンスによって実証されることになる。

ホワイエで

兵庫県立芸術文化センターの大ホール・ホワイエには、「VIP ROOM」と表示された14席ほどのちいさな「小屋」が仮設されている。



写真3 ホワイエに設置されたVIP室



写真4 VIP室内部

長津助教の社会的な弱者の鑑賞に対する環境整備の一つの試みとして、客席内の音場が、10本のスピーカによってこの小空間に再構成されているのである（舞台は映像モニターで提示）。この「VIP」室の企画意図について、次のような趣旨が説明されていた。

『多くの公共ホールにおいては、「母子室」「親子室」という他の観客から隔離された部屋が設けられている。最近では、高齢者が周りの観客への気遣いからこうした部屋での鑑賞を希望する例も出てきた。また、ハンディーキャップを

負った人にも必要な場合もある。今回は、音源だけではなく、会場の響きや観客の拍手などに包み込まれるような「音環境」を試みた。』

「母子室」ではなく「VIP ROOM」であると掲示したところに、劇場に足を運ぶ様々な観客に、最良の感動を得られる場を、それぞれの観客に合わせて提供したいという主催者側の強い思いが感じ取れた。

第三部SNK日本縦断高校音楽祭・ONねっとわーく

最後は、ネットワークを介して行われる3つの高校の演奏、ダンスの同期セッション。この「音楽祭」に参加したのは次の3校であった。

S- 札幌からは北海道札幌国際情報高等学校の“SIT Band”。彼らの演奏スタイルは、奏者自身がステップを踏み、フォーメーションを変えながら踊り、演奏する北海道発祥の新しい演奏形態で、「ダンプレ」（Dance & Play の略）と呼ばれるスタイル。

N- 西宮からは、兵庫県立高砂高等学校ジャズバンド部。映画「SWING GIRLS」のモデルと知られる。バンド名「Big Friendly Jazz Orchestra」は、名付け親が北村英二さんだという、実力派のビックバンド。

K- 北九州からは、北九州市立高等学校ダンス部“N9SD CREW”。ダンスといっても、高校の部活動としては珍しい、ストリート・ダンスが主体で、活動歴21年というから、こうしたグループでは、老舗だろう。

どの高校も、その地域、その分野では受賞歴を重ね、著名な団体であるが、おそらく、今回のようなイベントがなければ、各々の高校が互いの活動を知ることはなかったのではないだろうか？さらに、私と同じように、このセミナーに出席者の大半はおそらく、出演した高校の名前、パフォーマンスを、このセミナーの席で初めて知ったであろうし、その演奏に接して、パ

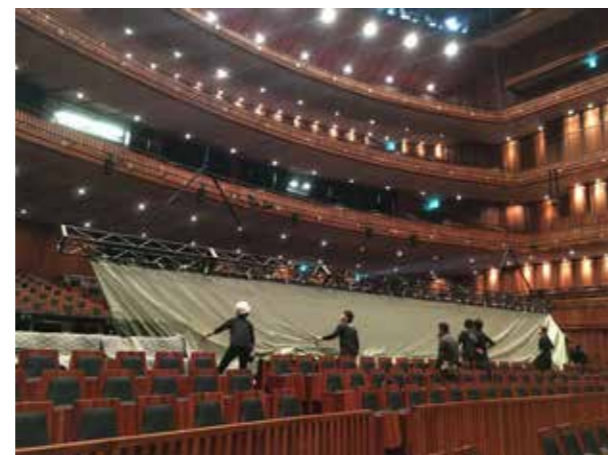


写真5 客席スクリーンの設置作業



写真6 客席に吊られた600インチモニター

フォーマンスの質の高さに度肝を抜かれたのではないだろうか。

各高校別のパフォーマンスの後は、「いよいよ、「繋がり、響き、感じ合う」と題された今回の技術セミナーの目玉である三高校の同期セッションである。兵庫では、ステージ上の出演者に向けて600インチの大スクリーンによるモニターが客席天井から吊り下げられ、他会場の様子が投影されて札幌、北九州との一体感が作られている。

音響的にも、各会場から送られてくる10チャンネルのアンビエンス音がステージ上に戻され、ステージ空間の音場の一体化が図られている。

映像の多少の遅延に起因しているのか、空間を隔てて「息を合わせる」ことへの慣れもあるのか、前日のリハーサル時には、合わせにくいといった場面も散見されたが、リズムセクションの主導権を曲ごとに受け渡すといったことが高校間で調整された結果だろうか、本番では、見事なアンサンブル、ダンスパフォーマンスとの共演がなされた。そのリハーサル終了時、「双方向性」の象徴的なことが起こった。ステージ上の生徒が、スクリーンに向かって手を振って呼びかけ、やがてジャンケンが始まったのである。そして、彼らはその日のうちに、SNSで互いに連絡を取り合い、交流が始まったという。

技術的な課題も互いを隔てる距離もわずかな時間で易々と乗り越えていく

彼らの柔軟性、それを苦にせずに演奏を通じて一体となっていく感性に感心するとともに、実験的なセミナーであることを忘れさせるような感動的なパフォーマンス体験に、客席は高揚した気分を満たされていった。

そこでは、単に、同じ場所、同じステージで3つの団体が共演することによって生まれる以上の「何か」が生まれているのだと感じた。それは、距離が離れていること、ネットワークインフラ、音響、映像、照明技術による疑似的空間であるという、いわばハンディーが、ハンディーがあるにも関わらず、ではなく、ハンディーがあるが故に、より開かれた感性を生み出し、パフォーマンスを、演奏を別の次元へと導いたといえないだろうか？この地理的な距離を隔てて「感じ合う」ことによって生まれる「何か」は、劇場



写真7 三校同期セッション（西宮会場）



写真8 三校同期セッション（北九州会場）

という空間に限られていた舞台表現を解き放ち、新たな表現形態の可能性を示唆するだけではなく、とすれば、分断し、差別化、個別化していく現代の技術と社会の流れに、一石を投じるものになりうるということを期待させるものでもあった。

バックステージにて

○兵庫県立芸術文化センター 舞台技術部 金子彰宏さんから

兵庫県立芸術文化センターでは開館以来、毎年、舞台技術セミナーを開催してきました。3年前のセミナーでは当日集まっていた42名の合唱メンバーに、本舞台、奥舞台、リハーサル室の3箇所に分かれていただき、マルチチャンネル再生（ヒビノ（株）・宮本さんの開発したSymph Canvas システム）の演奏に合わせて、レ・ミゼラブルを原語で歌うという企画を行いました。観客にとっては舞台上に見えるのは14名だけなのに42名の合唱とオーケストラを感じることができました。ただ結果的に、奥舞台、リハーサル室の方々にとっては一方的に声を送る側となってしまう、互いの演奏を共有し感じ合えるところまでは至りませんでした。

今回の技術セミナーでは先ず「ライブ配信等においてどのようにすればもっと共有感、没入感を得られるのか」を考え、その一つの方法として観客の拍手や声援を舞台上のアーティスト送ることによって、両者に一体感が生まれるのではないかと考えました。また、アーティストの音声も単なる2チャンネルステレオだけではなくアンビエントマイク to アンビエントスピーカーで再生することによって他会場の空気感をそのまま受け取るといった方法を試みました。実は札幌のパフォーマンスは動き回り踊りまくる吹奏楽ですので、その舞台上にもアンビエントマイクを配置していただき、客席アンビエントスピーカーで再生したところ、今まで体験したことのない空間を体感しました。まるで観客を取り巻くように、あるいは観客の間を練り歩くように演奏家たちが動き回っているのです。それこそ鳥肌ものでした。

また、親子室・母子室の環境を見直したいという思いで提案させていただきました。本文にも書いてくださっていますので割愛しますが、これは私がこの劇場の立上げに携わった時に気付いていなかったことの反省でもあります。

そして3校のセッションですが、これはなんといっても高校生達の感性に圧倒されるばかりで

した。それぞれレベルの高いパフォーマンスが3校集まり、素晴らしい化学変化を起こしました。かつて味わったことのない感動と興奮を覚えました。きっと高校生同士も刺激を与えあっていたのだと思います。これこそが遠隔地でありながらお互いの呼吸、空気感を感じ合えた形なのだろうと気づき、二度目の感動を覚えました。そして我々の拍手も札幌や北九州の高校生達にまで届いていることが実感できました。

終了後、普段は「生」に拘っている当劇場のゼネラルマネージャーや事業部からも理解を得ることができ、技術部共に常に「創客」を考えて日常を積み上げてきた賜物だと思います。

今回離れた場所で空気感を共有するということをテーマに掲げましたがそれはどの劇場も同じ音場にするのではなく、北九州は北九州の、札幌は札幌の観客のための表現をする。そのために各劇場スタッフが演出することが大切と考えました。あくまでも再現ではないということです。人と人との関係、そこに生身の人間を感じてこそ通じ合えるのだと思います。そのためには、拍手や歓声を同時に共有しているという聴覚的な印象が重要な役割を果たしてくれたと感じています。

改めて、今回試みた、ネットワークによって空間をつなげるということは、様々な可能性、展開があると感じました。

○北九州芸術劇場 テクニカルディレクター 中村国寿さんから

北九州芸術劇場では、これまで舞台技術講座を「劇場塾2012」音響編を始め、照明編、舞台機構編、劇場基礎クラスなどを実施してきました。今回の3館合同企画による、3拠点をネットワーク回線をつなぎ次世代技術の可能性の検証・実験は、当劇場では「劇場塾2019」の一環として、舞台技術セミナー「IT ネットワークで劇場をつないでみた！何ができる?!」と題して開催致しました。

本企画は従来的一方通行の配信や受信では無く、遠く離れた施設間での伝達と再現方法を探り、没入感や臨場感を得て感動の共有を可能にできないだろうか、技術者としての壮大な夢と希望に満ちた計画でスタートしました。

勿論、各館の事情や状況は異なる為、どう成立させるか手探りでもありました。

当劇場の場合、3館の中では最も早い2003年に開館しこれまで大規模な修繕や改修の実績も無く、音響や照明のIP化やネットワーク化はされておらず信号の伝送システムはアナログです。劇

場内の音響や照明がネットワーク化されていないにも関わらず、遠く離れた札幌や兵庫とネットワークでつなぎリンクしようという挑戦でしたが、全国的には当劇場と同様の設備状況の施設はまだ多く存在しますので、今回の当劇場の試みは重要な使命を担うものでもありました。

専用回線を使用せず、一般的なインターネット回線により3拠点の映像・音響・照明をネットワークでつなぐ技術的な問題もさることながら、その為に何ができる？何をやるのか？という最も重要で難しい課題に直面し、各々の会場で楽しめるコンテンツであること。事業や制作面でも成立するものであること。地域の公共施設として発信する価値があること。そして、ステージや客席の感動や興奮が共感を呼び共有へとつながるもの。これらの禅問答のような課題に対し熟考を重ね、3拠点施設の各圏域で活躍する高校生たちの共演（セッション）を提案させていただき、ここから札幌、兵庫、北九州の各地において全国規模で活躍する、『北海道札幌国際情報高等学校 吹奏楽部』、『兵庫県立高砂高等学校 ジャズバンド部』、『北九州市立高等学校 ダンス部』への協力の要請をはじめ、九州大学芸術工学研究院 尾本先生、長津先生への講演依頼、技術的なアプローチ方法など、企画内容のブラッシュアップを繰り返し図りながら各館の技術者同士はほぼ会うこと無く準備を進めていきました。

顔を合わせていない3館の技術者達により仕込みが進む様子は不思議な感覚でした。

当日開場の直前までである意味予定通りのネットワーク系と考えられるトラブルも発生し、技術的には妥協策も講じながら本番を迎えることになりましたが、サポート頂いたスタッフや劇場の優れた技術スタッフ達の力により幕を開けることができました。

本番では3校のスーパー高校生達の圧巻のパフォーマンスとこれまでも何度も共演したことがあるかのような驚愕のセッションに圧倒され、そして全部持っていけました。しかしそのことにより単に技術やテクノロジーを披露するセミナーでは無く、その技術を使って何ができるのか？何をやるのか？に拘ったセミナーを目指して良かったと思えた瞬間でもありました。

また、札幌で演奏するお孫さんを見に当劇場に来られたご夫婦の喜ぶ姿を目にして、このセミナーの目的がこれからの劇場のあり方や施設間の連携に技術がどう関われるかを考えるきっかけとして伝えられたのではないかと感じています。

本当に必要で大事なネットワークは人と人の

ネットワークだということを改めて噛みしめ、これを機に各地域間や施設間での連携が活発になることを願うと共に、私たちも今回の連携を糧に次につなげていけるよう更なる向上を目指します。

謝辞

本企画当初から協力と支援、また各会場に多数の技術者と機材を提供していただいたヒビノ株式会社様の全面的な協力なくしてはこの企画は成立しませんでした。厚く感謝申し上げます。また、VPNルーターをご提供いただいた古河ネットワークソリューション株式会社様、照明ネットワークにご協力いただいた東芝ライテック株式会社様、機材を提供いただいたヤマハサウンドシステム株式会社様の各企業の皆さま、九州大学 芸術工学研究院尾本教授、長津助教のご尽力に感謝申し上げます。そしてなんといっても三校の高校生達の前向きな参加、さらに各劇場スタッフの惜しみない努力がこのセミナーを支えてくれたことを添えておきます。

エピローグ

この公演の前日、筆者は下北沢の「楽園」という小劇場の客席にいた。柱を隔てて2方向に配置された客席は70席程度。演じる若い劇団には固定客も育っているようで、舞台と客席は濃密な空気で満たされていた。今回の舞台技術セミナーの案内を受け取って、札幌、西宮、北九州と3劇場をネットワークで結んでも、こうした一体感が生まれるものだろうか、ましてや、1,500k mも離れて、と私は、兵庫芸文の客席に座るまでは、半ば懐疑的だった。しかし、この実験的なセミナーが終わって、その懸念は氷解した。もちろん、パフォーマンスの内容が、音楽とダンスという、音場を媒介として一体感が生まれるものであったこと、そして参加した高校生たちの、新しいことに前向きな姿勢とエネルギーに圧倒されたこともあるけれど、距離が離れているが故に、より積極的に、より深く「感じ合おう」とする心の動きが生まれることを知ったのは、大きな収穫であった。こうしたことは、舞台芸術のジャンルを超えて、表現を求める自由な精神を広場へ、街へ、世界へと解放していく縁になりうる、新たな劇場の姿、可能性を示唆するものではないか、との思いを強くしながら、劇場を後にした。